

季刊文化財第一号 目次

重要文化財指定について——昭和二十九年六月指定……………文化財保護委員会(1)

武力紛争の際の文化財の保護のための条約……………岡田 孝平(8)

法隆寺金堂鴟尾の問題……………関野 克(27)

奈良を中心とする飛鳥・奈良時代遺跡の総合調査……………斉藤 忠(31)

国宝・重要文化財公開取扱注意品目について……………文化財保護委員会(34)

ヘーグの文化財条約の会議に出席して……………神田 喜一郎(60)



口繪写真

白峯寺十三重塔
醍醐寺開山堂
元暦校本萬葉集
元暦元年六月九日校合奥書(卷第二十)



ヘーグの文化財条約の会議に出席して

神 田 喜 一 郎

わたくしがヘーグに着いたのは四月十九日であつた。オランダはあたかも水仙の花盛りで、アムステルダムは飛行場に着いてからヘーグに向う途中、行き交う多くの自動車、車の前に水仙の大きな花輪をまきつけて疾走しているのが、オランダの第一印象であつた。ヘーグはまづたく静かな街である。立ちならぶ家屋が美しい上に、ひろびろとした森林があちこち街の中にあつて、その風景を一層ひきたてている。文化財条約の会議の開かれたのは、その街の一角にそびえている平和宮であつた。ここは昔から赤十字会議とか、そうした平和的な国際会議の行われてきたところで、いまでも国際裁判所がここにかけ置けていることは、おそらく世人周知のところであらう。

しかし、わたくしどもの出席した会議は、必ずしも平和宮の名にふさわしくスムースには進行せなかつた。ちよつと考えると、武力紛争の起つた場合、各国がそれぞれ自他の文化財を尊重して、これを保護してゆこうということは、何らそこに異議のはきむ余地も無さうで、至極結構なことである。

したがつて会議はスムースに運ぶべきはずなのであるが、この武力紛争の起つた場合、文化財を保護するということは、これを裏返してみると、大なり小なり軍事行動に制約を加えることを意味する。ここに問題が生ずるのであつて、すでにそれぞれの国の中においても、文官と武官との間に意見の一致しない点があるし、さらに各国の利害関係となると、これはまた極めて複雑微妙なために、会議はわたくしどもが最初予想していたよりも、はるかに面倒で、議論百出、波瀾重畳を極めたものであつた。

その上、さらにこの会議を難行せしめたのは、ソ連が出席して、共産世界の国と自由世界の国とが、いろいろな問題でかなり鋭く対立したことであつた。そういう事情で、最初三週間と予定せられていた会議も、とうとう二日延長となつたのであるが、その

間、午前十時の開会が九時に早められたり、午後七時の閉会が夕食後更に午後十一時過ぎまで続行せられたことも珍らしくなく、土曜日の午後も日曜日も、これを犠牲にしたことさえあつた。西洋人は、ねばり出すとなかなかねばるもので、われわれ日本人はこの点体力的にも劣るもののあることを、実はこのたびの会議に出席して、今さらながら痛切に感じたことであつた。

会議はその用語は最初、英・仏・スペインの三ヶ国語に限られていた。ところがソ連の要求でロシア語が加えられ、四ヶ国語となつた。われわれは耳にイヤホンをあてて、その四ヶ国語の中のどれかを任意に聞くのである。例えばわたくしは英語がもつとも解し易く、自分に便利であるとする。そうするとイヤホーンに連結されている電話のダイヤルの様なものを英語に合わせしておく。英語なら①、フランス語ならば②という風にきめられているので、ダイヤルを①にまわしておくのである。そうすると英語の演説は、演説者の肉声そのまま大きくイヤホーンを通じて聞えてくる。ところがだれかがフランス語で演説するとする。その場合は、その演説者の肉声は全然聞えない。そうしてそのフランス語が演説者のしやべる尻から英語に翻訳されて聞えてくるのである。つまり同時通訳という方法であつて、その通訳者がフランス語を英語にほとんど反射的ともいふべき速度で言いかえてゆく技術は、わたくしのような語学に下手な者から見ると、まづたく神技としか思えなかつた。

もつともヨーロッパでは、どここの観光バスにのつても、その案内者は大抵、英・独・仏・スペイン語は自由自在で、何語で質問してもすぐさま質問者の用いた国語で答えてくれる。日本でも今後大いに外人客を誘致するとなると、こんな案内者を養成する必要があるのではなからうか。

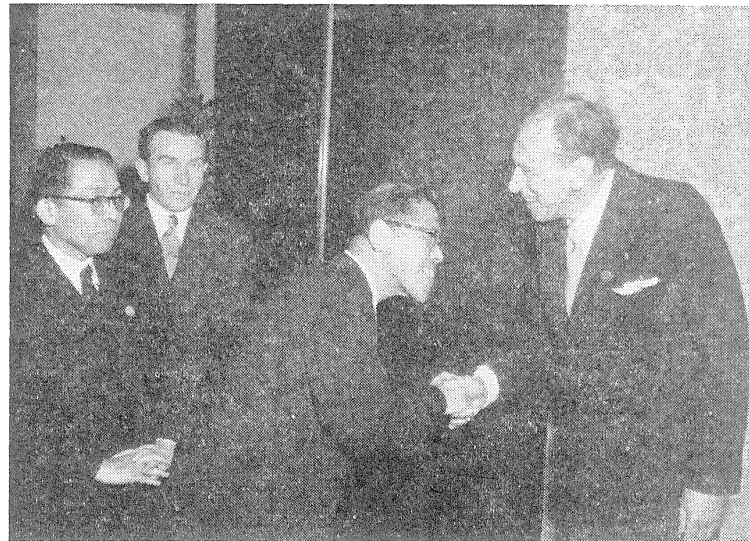
毎日毎日、朝から耳にイヤホンをあてて、なれない外国語を一語も聞きもらさじと緊張しながらきいているのは、実のところ相当につらいもので、夜になつて宿所に帰るとグッタリする。しかもそれが三週間もつづいたのであるから、かなり疲労したことはいふまでもない。

しかし、会期中に楽しいエキスカージョンもないではなかつた。六十人乗りの大型バス四台をつらねて、まる一日かなり遠くまで出かけたことがあつたが、そういう場合になると、各国代表ともに大抵は夫婦で参加し、中には子供を同伴している組もあつて、会議のことなどまづたく忘れたように、実に賑かで楽しいものであつた。男だけののは、われわれ日本代表団のもの位なもので、この点はなほはだ淋しいというよりも、何だかきこちなくて不体裁に感ぜられた。いろんなレセプションなどに出席する場合でもおなじことで、こうした点は、今後日本人が国際的に活動する上には、もつとまじめに考慮すべきことであると思う。日本の

習慣はこうだなんと言つても、それは通用しないことである。世界共通のエチケットの心得がもつとほしいものである。

もつともそれ以上に考慮すべきことは、日本人の外国語をしゃべる能力で、こうしたエキスカイションやレセプションなどに出てみると、会議に出席している時よりも一層外国語がもつと自由にしゃべれたらということを感じられるのであつて、これは必ずしもわたくし一人の感想だけではあるまい。

その他会議に出席していろいろ感じたことが多いが、わけても感心したのは西洋人の礼儀の正しいことである。毎朝会議に顔を出すと、誰でも皆「お早よう」と必ず挨拶する。玄関の入口などで会うと、決して自分で先には入らない。こちらへ「どうぞ」といつて譲る。こうしたことは実に感心である。しかも一種のユーモアがあつて、少しも堅苦しい感をあたえない。そうであるから、会議において議論が白熱化するようなことがあつても、興奮のあまり議事規則を破つたり、議長の命令に服従しないというようなことは決してない。これは各国代表ともにそうであつて、したがつて会議がいくら紛糾しても、日本の議会のような混乱には絶対に陥らない。これは会議に出席して、実に気持のよいことである。わたくしはこの会議をおえて、各国を一巡視察した後、六月四日に羽田飛行場に帰着したが、そのとたん六月三日のわが議会の乱闘事件のことを聞かされて、本当に何とも言い知れぬ感を抱いて家路を急いだことであつた。(京都国立博物館長)



写真は、ヘーグ、ウイテにおけるユネスコ主催レセプションの風景。向つて右よりユネスコ美術館および記念物課長ヴァンデルハーゲン氏、神田代表顧問、一人おいて岡田代表顧問。

昭和29年12月1日発行

季刊文化財第1号

発行者 文化財保護委員会

印刷所 青樹印刷株式会社
東京都中央区日本橋茅場町2ノ7